



線香花火が消えるまで

～未亡人のわたしと、亡き夫の親友～

線香花火が消えるまで（体験版）

蜜夜文庫

く 未亡人のわたしと、亡き夫の親友く

蜜夜文庫【体験版】

...

第二話 線香花火の夜

夫が死んでから、二度目の夏が来た。

結城美緒、三十二歳。二年前に夫の拓海を亡くしてから、わたしはこの小さなカフェを、ひとりで切り盛りしている。

駅から少し離れた、路地の奥。拓海が「いつか自分の店を持つのが夢なんだ」と言つて、二人で貯金をはたいて開いた店だった。木の看板も、壁の珈琲色のペンキも、カウンターの古びた木目も、ぜんぶ拓海が選んだ。あの人の手の跡が、この店のいたるところに残っている。レジの横の、少しだけ傾いた棚。直そう直そうと言いつつながら、結局そのままになってしまった棚。それを見るたびに、わたしは泣きそうになる。

拓海は、トラックにはねられた。雨の朝、横断歩道で。あつけないくらい、突然に。

救急車のサイレンも、病院の白い廊下も、棺の中の冷たい横顔も、今でも夢に出てくる。三十歳で、わたしは未亡人になった。世界から、色が消えた気がした。

だから、わたしはこの店を閉められない。閉めてしまつたら、拓海がこの世界にいた証拠が、また一つ消えてしまう気がして。朝、シャッターを開けて、豆を挽いて、誰も来ない日でも、わたしはカウンターに立ち続けた。そうしているあいだだけは、まだ拓海と一緒に夢を見ているような気がしたから。

三回忌の、その夜だった。

法要も会食も終わって、参列してくれた拓海の両親や親戚を見送って、ようやく店に戻ってきたのは、夜の八時を過ぎたころだった。喪服のままの肩が、やけに重い。慣れない正座と、絶え間ない挨拶と、「美緒さんも、そろそろ次のことを考えないとね」という親戚の言葉の重さで、体じゅうが軋んでいた。

仏壇の拓海の写真は、いつもと同じ、人なつこい笑顔のままでわたしを見ていた。

あなたは、いつまでも笑っているのね。わたしばかり、こんなに歳をとっていくのに。

ヒールを脱いで、ストッキングの足で店の床に立つと、ふいに、涙がこぼれそうになった。二年経っても、ふとした瞬間に、こうなる。悲しみは、消えてなくなったりしない。ただ、見て見ぬふりがうまくなっていくだけだ。

カウンターの奥に、二つ並んだマグカップが、今も置いてある。お揃いの、藍色のカップ。ひとつは、もう二年、使われていない。それでも、わたしは毎朝、二つとも洗う。拓海のぶんも、温めておくみたいに。馬鹿みたいだと、自分でも思う。でも、そうしないと、朝が始まらない気がした。

結婚していたのは、たった四年。出会ったのは、大学の写真サークルだった。ファインダー越しに笑う拓海は、いつだって世界のいいところばかりを切り取る人で、わたしの強ばった横顔を、「美緒は、笑うともつといい顔するのに」と言つては、こつそりシャッターを切った。あの人が遺した何百枚もの写真の中で、わたしは、今よりずっと、やわらかい顔をして笑っている。

——あなたがなくなってから、わたし、ちゃんと笑えてるかな。

仏壇に供えた白菊が、エアコンの風に、かすかに揺れた。

「美緒さん」

店の扉が、からん、と鳴った。

振り返らなくても、誰だかわかった。低くて、少しかすれた、優しい声。この二年で、何度この声に救われたか、わからない。

「涼介くん」

篠原涼介。拓海の、いちばんの親友だった人。

学生時代からの付き合いで、結婚式では友人代表のスピーチをしてくれた。「拓海、美緒さんを泣かせたら、俺がぶん殴るからな」なんて、おどけて言つて、会場を笑わせた人。拓海が死んでも、何かと理由をつけては店に顔を出し、重い荷物を運んでくれたり、壊れた換気扇を直してくれたり、税理士を紹介してくれたたりした。三回忌の準備も、案内状の宛名書きから会場の手配まで、ほとんど彼が手伝ってくれたのだ。

二十九歳。拓海より三つ下の、わたしより三つ下。背が高くて、無口で、いつも少し困ったような顔で笑う人。手の大きな、不器用な人。

「ごめん、もう閉めるとこだったよね。……今日は、お疲れさま」

「ううん。……ちょうど、ひとりで気が滅入ってたところ」

正直に言ってしまったから、少し後悔した。彼に気を遣わせたくないかったのに。でも、涼介くんの前では、わたしはどうしてか、強がるのが下手になる。

「無理、してないか。今日、ずっと気を張ってただろ」

「……ばれてた？」

「美緒さん、しんどいときほど、背筋が伸びるから」

そんなことまで、見られていたなんて。気づかれないようにしていたつもりだったのに。胸の奥が、じんとした。

涼介くんは、片手に小さなコンビニの袋を提げていた。中から、見覚えのあるものを取り出す。線香花火の、小さな束。

「これ、拓海が好きだったろ。あいつ、花火っていつたら打ち上げより線香花火派でさ。『最後にぽとつと落ちるのがいいんだ』って、わけのわからないこだわりがあって」

思わず、笑ってしまった。久しぶりに、声を出して。

「……覚えてる。毎年、夏になると、裏の路地でやってた。あの人、子どもみたいにはしゃいで、すぐ消しちゃうのに、何本も何本もやって」

「で、最後に必ず『来年もやろうな』って言うんだよな」

来年も。その言葉が、もう叶わないものになってしまったことを、二人とも知っていた。

「やるぞ」 涼介くんが、線香花火を差し出した。「拓海の、供養に」

わたしは、こくりとうなずいた。

店の裏の、細い路地。バケツに水を張って、二人で並んでしゃがんだ。涼介くんがライターで火をつけると、線香花火の先に、ぱちぱちと小さな火花が宿る。橙色の光が、彼の横顔を照らした。少し伸びた無精ひげと、まっすぐな鼻筋。拓海とはまるで似ていないのに、その横顔を見ていると、なぜか胸が締めつけられた。

「拓海さ」

火花を見つめたまま、涼介くんが言った。

「死ぬ前の年に、俺に言ったんだ。酒の席で、ぼろつと。『もし俺に何かあったら、美緒のこと、頼むな』って。冗談みたいに笑いながら。あのときは、何バカなこと言ってんだよって、流したけど」

火花が、ぱちぱちと散る。彼の指先を、頼りなく照らしている。

「ほんとに、何かあっちゃって。……俺、あいつとの約束、ちゃんと守れてんのかなって、ずっと思ってる。美緒さんの力に、なれてんのかなって」

「守ってくれてるよ」

わたしは言った。胸の奥が、じんと熱くなる。

「涼介くんがいなかったら、わたし、この二年、たぶん立ってられなかった。換気扇のことも、税理士さんのことも、ううん、そういうことじゃなくて……。あなたが、ときどき顔を出してくれるだけで、わたし、まだ世界とつながってるんだって、思えたの。ありがとう。本当に」

涼介くんは、何も言わなかった。ただ、線香花火の火花を、じっと見ていた。喉仏が、ひとつ、上下した。

ぱち、ぱち、ぱち……。火花が、だんだん勢いを失っていく。最後に、ひときわ大きな玉になって——ぽとり、と地面に落ちた。

拓海の好きだった、あの瞬間。

涼介くんが、立ち上がろうとして、足がしびれていたのか、ふらりとよろけた。とつきに、わたしは手を伸ばす。彼の腕を掴んだ。シャツ越しに、男の人の腕の、硬い感触。二年間、忘れていた温度。触れた瞬間、彼の体が、びくりと固まったのがわかった。

「……美緒さん」

暗がりの中で、涼介くんがわたしを見ていた。いつもの困ったような笑顔は、そこになかった。何かを、必死にこらえているような、苦しそうな目。バケツの水面に映った街灯が、彼の瞳の中で揺れていた。

「ごめん。俺、ずっと、言えなかったことがあるんだ」

心臓が、ひとつ、大きく鳴った。掴んだ手を、離せなかった。

「拓海の親友のくせに。あいつの三回忌の夜に。こんなこと言うの、最低だって、わかってる。墓の下で、あいつに殴られても文句言えない。でも——もう、これ以上、隠してられない」

彼の手が、わたしの腕に重ねられた。そして、ゆつくりと、わたしの頬に触れた。大きくて、少しごつこつした、温かい手。

「俺、学生のころから、ずっと美緒さんのことが好きだった」

夜の路地に、彼の声だけが、ぽつりと落ちた。

知らなかった、わけじゃない。本当は、気づいていたのかもしれない。彼がこの店に通ってくれる理由を。わたしを見る目の、奥にあるものを。重い荷物を運ぶふりをして、わたしのそばにいてくれた、その意味を。気づかないふりをしていただけ。だって、彼は拓海の親友で、わたしは拓海の妻で——もう、拓海はいないのに。

「拓海が好きだったのを、横取りしようなんて思っていない。美緒さんが、一生あいつのこと忘れられないなら、それでいい。今だけ、一回だけでいいから」

涼介くんの顔が、近づいてくる。彼の吐息が、唇にかかった。

「俺のこと、見て。今夜だけ、拓海の奥さんじゃなくて、美緒さんでいて」

わたしは、目を閉じなかった。彼の目を、見つめ返した。二年間、ずっと張りつめていた何かが、この人の前で、音もなく崩れていく。さびしかった。本当は、ずっと、誰かに触れてほしかった。強い未亡人であることに、わたしは、もう、疲れていた。

——この続き（濃厚な本番＋第2話・第3話）は、製品版でお楽しみください。